第3章　町人の姿―幕末から明治へ

商都として活況を呈していた大坂には富裕な町人が多くいました。彼らの中には家族の姿を子孫に伝えようとする者、また記念すべきことがらを自身の姿と共にとどめようとした人がいます。歴史的な人物とは異なり、その生涯を詳しく知ることはできない人物もいますが、何らかのきっかけにより、その姿をとどめた作品が伝わっています。斜め向きに座った表現をとる作例も多く、幕末から維新にかけては大きな政治的変化があったものの、肖像画ではそれ以前の俗人表現が引き継がれていたことがわかります。

奥村房次郎像　鎌田巌泉筆
明治時代
本館蔵（藤井雄介氏寄贈）

描かれているのは大阪で銅器を制作していた奥村房次郎です。彼の詳しい伝記はわかりませんが、北浜に住み、明治6年（1873）にオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会に銅器を出品したことが当時の記録からわかります。彼の作品はウィーンの万国博覧会事務局から表彰され、優れた出来栄えであることが認められました。この肖像画の上部には、その褒状が写し取られています。自身に起こった記念碑的な出来事を、自らの姿とともにとどめようとしたことがわかります。絵の筆者は幕末から明治にかけての大阪で活動した鎌田巌泉です。

瓢遊喜寿像　梅陰筆
明治 21 年（1888）
本館蔵（宮里圭子氏寄贈）

大きな瓢箪を担いだ姿で描かれているのは、大坂の北浜に築かれた蟹島新地（今橋築地）にあった料理旅館の主人帯屋源兵衛ことみやさとひょうゆう宮里瓢遊（1812～89）です。彼の宿には幕末の勤皇家清河八郎も宿泊しています。瓢遊は瓢箪を好み瓢箪の一大コレクションを作り上げました。そのコレクションのうちに大瓢箪がふたつあります。いずれも大坂の豪商鴻池屋と千草屋から譲り受けたものです。この作品は立派な瓢箪を譲られた瓢遊が喜寿の祝いに描かせた姿です。

その他の主な展示作品

作品名称	作者	年代	員数	所蔵
慈雲尊者像	慈雲賛	江戸時代	1幅	本館蔵（東原秀夫氏寄贈）
入江昌喜像		江戸時代	1幅	本館蔵（小寺純雄氏寄贈）
森川竹窓像	大野文泉筆	文政11年（1828）賛	1幅	本館蔵（森川正子氏寄贈）
森川芝園像	香川氷仙筆	江戸時代	1幅	本館蔵（森川正子氏寄贈）
若松家主人像	長谷川貞信筆	江戸～明治時代	1幅	本館蔵（伊勢谷慶子氏寄贈）

本展示は、日本学術振興会科学研究費補助金採択研究課題「東アジアにおける影幀を用いた人霊祭祀研究に対する学際的方法論の構築（JSPS科研費20K20676）」（研究代表者井上智勝）の成果の一部です。

謝辞　作品ご寄贈者の皆様、画像利用にご高配いただきました真言宗泉涌寺派総本山 御寺泉涌寺様、助成をいただきました独立行政法人日本学術振興会へ厚く御礼を申し上げます。

大阪歴史博物館
Osaka Museum of History
〒540-0008　大阪市中央区大手前4-1-32
電話 06-6946-5728　FAX 06-6946-2662
https://www.osakamushis.jp

特集展示　描かれた人たち　―尊崇・憧憬・追憶―
会　　期：令和6年（2024）1月10日（水）～3月4日（月）
展示担当：岩佐伸一（大阪歴史博物館）
展示協力：井上智勝（埼玉大学）、松浦清（大阪工業大学）、平川信之（沖縄県立博物館・美術館）
会　　場：大阪歴史博物館 8階 特集展示室（常設展示場内）

開館時間：午前9時30分～午後5時
※入館は閉館30分前まで

休 館 日：毎週火曜日

観 覧 料：常設展観覧料でご覧になれます。
大　人　　600円（540円）
高校生・大学生　400円（360円）
※（ ）内は20名以上の団体料金
※中学生以下、大阪市内在住の65歳以上（要証明証提示）の方、障がい者手帳等をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料

Osaka Metro 谷町線・中央線「谷町四丁目駅」②・⑨号出口
大阪シティバス「馬場町」バス停前

特集展示

描（えが）かれた人たち
―尊崇（そんすう）・憧憬（しょうけい）・追憶―

令和6年 2024 1月10日（水）▶3月4日（月）　火曜日休館

古来、人は人を絵に描いてきました。憧れの人として、懐かしい人として、時には人を超越した神として。人は必ずこの世を去りますが、描（えが）かれた人は永遠の命を手にして生き続けるのです。本展覧会では、大阪歴史博物館の収蔵品から選りすぐった“描かれた人たち”が大集合します。

たとえば、歌人として活躍した柿本人麿（かきのもとのひとまろ）は後世には歌の神とされて祀（まつ）られ、多くの絵画が残されています。また戦国時代に立身出世を遂げた豊臣秀吉は、没後に神として祀られることを望み、その肖像画の中には神を思わせる威厳のある姿に描かれた作品もあります。茶人の千利休、浄瑠璃（じょうるり）作者の近松門左衛門ら優れた先人への憧れを思わせる肖像画、自身の記念として描かれた作品も残されています。この機会に、“描かれた人たち”との時空を越えた、言葉なき対話をぜひ楽しんで下さい。

なお本展覧会はJSPS科研費20K20676の助成を受けています。

孔子像
享保 11 年（1726）賛　個人蔵

描かれているのは、古代の中国で活動した孔子（紀元前552～479）です。彼の教えは後継者によって体系化されて儒学となり、中国をはじめ東アジア諸国における教養かつ道徳的な教えとして重んじられました。その像は各地に設けられた孔子廟や学校に祀られ、釈奠（せきてん）という孔子を祀る儀式でも尊崇の対象とされました。本図は長崎において輸入された書画の鑑定などを行う唐画目利職（からえめききしょく）にあった渡辺秀石（しゅうせき）（1639～1707）の筆と伝えられています。賛は中国明代の官僚であった胡纘宗（こさんそう）の文を儒学者の伊藤東涯が記しています。

大阪歴史博物館

第1章　神格化された人の姿

人は古くから礼拝のための像を描きました。そのうちには実在した人物を神などとして尊崇するために描いた像が残されています。日本では聖徳太子、孔子やその門人、真言宗や天台宗の高僧像が描かれました。それらは、描かれた人を絵師が直接その顔かたちを見て写し取ったものばかりではありません。先行する作例に基づいたり、礼拝のために威厳のある理想化した姿で描かれることも多くあったことでしょう。本章では後世の人々により、神として扱われた実在した人の姿を紹介します。

柿本人麿像

室町～江戸時代　本館蔵（前田善衛氏寄贈）

歌聖として尊崇された古代の歌人柿本人麿の像です。その生涯は詳しくは知られませんが、官僚として仕え多くの歌を残しました。後世には住吉明神、玉津島明神とともに和歌を守護する和歌三神の一柱とされました。平安時代後期以降には、宮廷や貴族たちの間で人麿の肖像画を掲げ、和歌をささげて歌道の繁栄を願う「人麿影供（ひとまろえいぐ）」が行われ、本図はそのような折に掲げられる図様に似ているため、祭祀に用いられた可能性があります。

豊臣秀吉像

江戸時代　本館蔵

織田信長の後に権勢を誇った豊臣秀吉（1537～1598）は、死後に神として祀られることを望み、没後に「豊国大明神」の神号が朝廷より奉られました。京都の方広寺の鎮守社である豊国社に神として祀られるに至りました。秀吉の肖像画のうちには、神殿風の建物内に座った作品が複数残されており、神格化されていた様子がしのばれます。描かれた顔かたちは、実在した本人に近いと思われる作品（高台寺本）もあります。本作品には神殿風の建物は描かれていませんが、烏紗帽（うしゃぼう）をかぶり、白の直衣（のうし）に指貫（さしぬき）を履き、笏を手にして纐纈縁（うんげんべり）の畳に座った姿は、神格化された秀吉像に通じます。

第2章　諸芸に通じた上方（かみがた）の人々

京都や江戸と並んで三都のひとつとされた江戸時代の大坂では、学問や芸術、文学や演劇などの活動が盛んになりました。たとえば近松門左衛門は大坂の竹本座で大入りとなる浄瑠璃を書いて一層その名が知られ、俳諧師の芭蕉は大坂の後援者宅で最期を迎えました。宗教者や医学者にも優れた活動をした人々がおり、彼らに憧れ、その遺徳をしのび、思いを寄せるためにもその姿が描かれました。本章では大坂にゆかりのある、文化や芸術などに通じた人々の肖像画を紹介します。

近松門左衛門像

江戸時代　本館蔵

人形浄瑠璃や歌舞伎の作者として知られる近松門左衛門（1653～1724）は、越前出身で京都に出て浄瑠璃作者となります。大坂道頓堀で竹本座を旗揚げした竹本義太夫のために書いた「曽根崎心中」が好評を得て、そののちは大坂に転居し「心中天網島」などを書きました。近松の肖像画には、自筆の賛を伴い、烏帽子（えぼし）姿で畳に座った像もありますが、本図はそれと趣を異にしています。画面の下部にかしこまって座る近松が描かれるほかは広い余白とし、近松の像であることを示すのは、像の脇に記された「巣林子（そうりんし）近松翁像謹写」の文字のみです。近松と親しい人、またはその活躍を知る人が彼を偲ぶために描かせたものかと推測されます。

鯛屋貞柳像　大岡春卜筆　梁田蛻巌賛

江戸時代　本館蔵

油煙斎貞柳（ゆえんさいていりゅう）（1654～1734）は、大坂御堂前の菓子商鯛屋の主人でしたが、狂歌を好み、のちには家業を廃して狂歌に専念しました。父や叔父も狂歌や俳諧を好み、弟は浄瑠璃作者の紀海音（きのかいおん）です。狂歌師となってからは僧の姿となり、本図も剃髪し、墨染の衣をまとった姿に描かれています。旧暦の8月に亡くなったためか、下着の透けた薄手の衣を羽織っている姿に描かれています。このことから本図は貞柳を知り、彼を思慕する人が描かせた遺像の可能性が指摘できます。賛は儒学者や漢詩人として知られた梁田蛻巌（やなだぜいがん）が記し、絵の筆者は大坂の狩野派画家大岡春卜（おおおかしゅんぼく）です。